

アウトサイダーアートから何を学ぶことが出来るのか

マルティヌ・リュサルディ館長 講演

はじめに

みなさん、こんにちは。皆さんにお会いできて大変うれしく思っています。私がこういった講演をするのは、日本では初めてのことです。こういった講演ができるのも、私が館長をしているパリ市立アル・サン・ピエール美術館で、日本のオール・ブリュットの作品を展示することになったからです。この展示に先駆けて、私は今年(2009年)の初めに日本に参りました。そして展示すべき作品を自分自身で選びました。作家の方もお会いしましたし、こんな作品があったのかというような素晴らしい作品との出会いもあり、失礼ですが非常にびっくりしました。私としては、日本の作品がフランスの人々に受け入れてもらえればなと思っています。パリでの日本のオール・ブリュット展は長く開催されますので、ぜひ皆さんパリにいらっしゃることがあれば、ご自分の目で見て頂きたいと思っております。

オール・ブリュットとデュビュッフェによる3つのグループ

これから皆さんにオール・ブリュットについてお話するのですが、オール・ブリュットというのはアートという見解でも特殊な分野です。ですので、私もあまり難しい特殊な言葉を使わず、お話ししようと思っております。オール・ブリュットというのは、今日では非常に幅広いアートを指す言葉として使われています。元々オール・ブリュットという言葉を考え出したのは、フランスの画家であるジャン・デュビュッフェという人です。彼がオール・ブリュットというものを発見したわけですが、その後オール・ブリュットからいろいろなものが派生して、多くの作品が生まれてきました。私の考えでは、ちょっと幅が広げられ過ぎてしまったかなと思っています。ジャン・デュビュッフェという人は言葉自体を考え出した人ですが、最初の作品は精神病院で、第二次世界大戦の後に発見しました。彼は集めた作品をスイスのローザンヌ市に寄付しました。それらの蒐集作品をもって「オール・ブリュット・コレクション」という美術館がローザンヌ市に作られました。もうひとつ付け加えるならば、デュビュッフェ自身も芸術家であり、オール・ブリュットのコレクションは芸術家の目で見ると、芸術だと思われる作品を集めたコレクションであるということです。デュビュッフェ自身は、オール・ブリュットの中でも作家の性質によって3つのグループを設けています。第1はクレイジーな人のアート。クレイジーという意味はちょっと私的な意味で使っています。第2は霊媒、霊能者のアート。もうひとつは占い師とか予言者、あるいは社会から隠遁している人のアートです。この3つのグループの作家の作品は、クラシックといわれています。デュビュッフェはどのようにこの3つのグループを選んだか、彼はいつでもオール・ブリュットであると定義したわけですが、その中で彼が言いたかったこととして、どんな文化の影響も受けない、純粋なクリエイションがオール・ブリュットの原点だということがあります。もちろん、デュビュッフェはできるだけ文化の影響のない純粋なアートを好んだのですが、実際にはまったく文化の影響を受けないアートというのは存在しえないわけです。文化があって人間がある、人間があるところに文化があるという感じで、世界各地に同じようなオール・ブリュットの作家がいますが、それぞれその場所の文化や歴史というものが影響しています。

現代アートとオール・ブリュット

これから私がお話しするのは、現代アートとオール・ブリュットとの関係です。何を言いたいかというと、アートの作品についてはいろいろな解釈が可能なのですが、悪い解釈、してはいけない解釈というものがあります。それがどうしたものかということをお話していきたいと思っております。オール・ブリュットの作品は、現代芸術の枠の外にあるマージナルなアートです。これらのオール・ブリュットの作品は、現代アートというのは何かという問題について多くの疑問を呈したわけですが、同時にもっと幅広く、クリエイションというのは何かということについても多くの問題提起をしています。オール・ブリュットについてよく言われたのは、これは「気違い」のアートだということです。そして狂気のおかげでクリエイションが

可能だという見方もされました。特に、20世紀初めのロマン主義が終わった頃は、精神病学者もそうでしたが多くの学者が、天才と狂気を関連付けようと試みた時代でした。私の考えでは、狂気とクリエイションは関係ないと思います。クリエイションをする人がすべて気違いでもありませんし、気違いがすべてクリエイターでもありません。もし、狂気、精神病が天才に結びついているのであれば、どこの精神病院にも天才的な作品があることとなりますが、そうではありません。

オール・ブリュットが教えてくれるもの

オール・ブリュットというものが我々に何を教えているかということ、「アートの根源が何か」ということではないでしょうか。オール・ブリュットの作家たちはある人生の一時期に突然、作品を作り始めます。それはやむにやまれず、自分が生き続けるためにはどうしてもそれをやらなければならないと、切羽詰まってやり始めるわけです。それからもうひとつ、オール・ブリュットの作家というのは一度、作品をつくりはじめることと生涯やめることができません。何かにとりつかれたようにそれを続けます。さらにもうひとつの特徴は、少なくとも最初は、あるいは生涯かもしれませんが、人知れずこっそりと作品を作る。誰かのために作るのではなく、自分のために作品を作ります。オール・ブリュットのアーティストたちというのは、まったく無意識に何かを作り出しているという感じではありません。もちろん、機械的に、あるいは自動的に何かをする時間はあるかもしれませんが、意識と無意識の間を往復しながらクリエイションをしているアーティストです。これらのことが、オール・ブリュットの作家たちが私たちに教えていることではないでしょうか。何かを作り出す、生み出すというのはどういうことか、クリエイションの結果とはどういうものかということ、オール・ブリュットのアーティストたちは私たちにもう一度考えるように迫っているのではないのでしょうか。特に、収益性、有用性などが重視される物質的な社会に住んでいる私たちは、クリエイションという行為、あるいは作品と自分との関係というのをもう一度考えてみるべきではないでしょうか。

オール・ブリュット氾濫の時代に

今や、オール・ブリュットはもてはやされるようになり、アーティストたちも認知されるようになってきました。そういう意味でジャン・デュビュッフェが発掘していた時代とは逆になったわけです。見向きもされないアートではなく、みんなが飛びついてコレクションしたいと思うようなアートになりました。実際、アメリカではオール・ブリュットの見本市のようなものが開かれ、もてはやされているわけですが、しかしながら少し前にはアロイズ・コルバスもアドルフ・ヴェルフリもまったく無名のアーティストだったわけです。デュビュッフェやシュルレアリスムのアーティストたちのような人が発見したおかげで、こういったアートが認知されるようになったわけです。これは認知をまったく目指さないオール・ブリュットとは逆の状況になっているのです。呼ばれ方は違いますが、風変わりなアート、アウトサイダーアートなどと新しく裾野が広がったわけで、オール・ブリュット自体も概念として広がってききましたが、これからどういう時代が来るのかと考えると、オール・ブリュットが氾濫してしまう時代になってしまうのではないのでしょうか。3つの気をつけなければならないことが起こっています。1つは「行きすぎ」ということです。偽物のオール・ブリュットが氾濫するというです。子供っぽい絵を描いたり、にぎやかな色使いをしたり、一度捨てたものをつかたり。そういう技術は簡単に学べるので、それを駆使し



パリ市立アル・サン・ピエール美術館 マルティヌ・リュサルディ館長

たオール・ブリュットの偽物作りが起っています。実際に偽物作りをしているのは、非常に器用なアーティストたちです。ですから皆さん、「私はオール・ブリュットのアーティストです」と言って作品を売ろうとする人がいれば、これは偽物だと思ってください。もうひとつの「行きすぎ」の現象として見られるのは、ヨーロッパでもアメリカでも日本でも見られる傾向ですが、障害者用の施設に増えているアートセラピーのアトリエです。こういうところでは、医学などは排除して障害者に作品を作らせている傾向にあります。アートセラピーの作業所、あるいは作業療法のセンターと呼ばれるところが目的としてやっているのは、そこにいる障害者にどんどん作品を作らせてそれを売って儲ける。商業的な目的しかなく、関心があるのは障害者一人ひとりの身の上ではなく、その作品をどうやって売りこむかということです。ですから注意していただきたいのは、こういった施設、作業所の第一の使命というのは、障害のある人を援助して、彼らの自己表現を手伝うことであって、彼らに作品を作らせてそれをオール・ブリュットの市場に出すことではないということです。あくまでもこういった施設や作業所の目的というのは、アートを通じて個人個人を助けるということです。施設、作業所の利用者の家族に、「ここに入って作品を作ればあなたのお子さんもたくさんお金を稼げますよ」というような考えを与えることの危険性を認識しなければなりません。そういうことをしていると、精神病なら誰でも才能を持っている、天才に結びつくというような2世紀も前に流行したような考えに逆戻りすることになります。現実を見てみると、そういったアートセラピーのアトリエにも天才はいるかもしれませんが、しかし同じ比率で、美術学校に通っている学生の中にも天才はいるわけです。それを忘れないでいただきたいと思っております。それから、オール・ブリュットと現代アートを取り違えないことが重要だと思います。オール・ブリュットの元々の形と、現代アートは重なる部分もあるかもしれませんが、まったく異質のアートであるということを忘れないでほしいと思っております。現代アートというのは、突き詰めていくと作品にまったく意味を与えない作品というのが追求されているようなところがありますが、オール・ブリュットは重い意味を持ち、アーティストが自分の思いを込めたアートです。2つはまったく違うのです。オール・ブリュットというのは、私の考えでは現代アートの対極にあると言いましたが、なぜそう考えるのかということ、私は現代アートというのは人間を忘れてしまったアートだと思うからです。現代アートは、人間の持つ精神的な1つの側面に注目してそれを突き詰めていくアートなのですが、実際に人間というのはその側面だけではありません。

マルティヌ・リュサルディ館長に聞く

人間には心があり、感情があり、体があります。そのすべてを駆使してアートを作らなければならないわけですが、現代アートというのはそれを無視して1つの側面、どちらかというと精神面だけを重視したようなアートになっています。

アール・ブリュットというのはそうではないのです。人間はこの3つを持っているということなくして、アール・ブリュットとは言えません。いつの時代にも自分の内にもってなんの拘束も受けないで、他人の目を気にせずに自分の作りたいものだけを作るアーティストというのが存在します。その一方では必ず権力を持った人がいて、そういった独立した人々を手なづけようとします。その人たちは「自分の利益を考えない人たちがいるのは恐ろしいことだ」と言って、そういう人たちを黙らせて取り込もうとします。

アートは人間性の最大の表現である

私はアール・ブリュットの作品を捉えるときには、全体を見るべきだと思います。それがよく分かる作品として、ビスポ・ディ・ロザリオという人の一連の作品があります。彼は精神病を患って病院に入って、こういった作品を作ったわけですが、身の回りにある、あるいは捨てられたものをリサイクルして、数多くの作品を作りました。これの一つひとつの作品と捉えるというのは危険なことです。というのも、彼は「いつかは死ぬ時が来るだろう、そして自分は神の前に出て自分が生きてきたことを証明しなければならぬ、そしてこの世界はどういうものかということに神に教えなければならぬ」ということで、世界にあるいくつかのものを、小さな形に縮小していろんなものを作ったからです。

「自分が死んだ時に神様の前に持って行く、見せる」と思って作っているわけで、作品の1点だけをとりあげて、「これはコンテンポラリーアートの作品だ」とか言うのは非常に危険なことなのです。彼がどういう目的をもって作品を作ったかということも、まったく無視してしまうことになります。ちょうどヨーロッパの強国がアフリカに行って、アフリカの文化や考え方を無視して植民地支配しているのと同じことになります。そういった意味でのアール・ブリュットの植民地化をしてはいけません。アール・ブリュットの植民地化というのはどういうことかということ、アール・ブリュットの作家一人ひとりの人間性を否定してしまうということです。作品1点1点の個別の作品だけにしか目を向けなくて、それを作った人間というものを忘れてしまうことです。

よく考えてみますと、作品というのはそれを作った人間の表れであるわけです。そして、アートというのは生きていくわけで、アートというのは人間性の最大の表現だと言ってもいいと思います。それを忘れてしまっただけは世は破滅に向かうしかないと思います。人間性というのを忘れてはなりません。

アール・ブリュットの作品はそれぞれ素晴らしい作品ですが、それを作った人たちは苦しんで苦しんで、自分が生きるためにこれを作ったわけで、そういうことを忘れて作品1点だけを取り出して、どういう価値があるとか評価云々というのは間違ったことで危険なことだと思います。

～'09.12.12 北海道立旭川美術館 アロイズ展特別講演～
◆独立行政法人福祉医療機構「長寿・子育て・障害者基金」助成事業
◆主催/NPO法人ラポラポラ

(編集 田端一恵)

リュサルディ館長 来日時の日程

2009年12月

11日(金)来日 北海道旭川市へ移動

12日(土)北海道立旭川美術館「アロイズ展」において講演

13日(日)北海道内視察

14日(月)東京へ移動

15日(火)顧問・実行委員長・副委員長との懇談会、プレス対応
日本財団表敬訪問、作家との懇談会

プレス対応(スケジュール順)
読売新聞、日本経済新聞、毎日新聞、朝日新聞

16日(水)東京都内視察

17日(木)帰国

Q:各国のアール・ブリュット作家をご存じだと思のですが、日本の作家の特徴というのはなにかありますか？

A:それはイエスでもあり、ノーでもあるんです。アール・ブリュットの表現というのは、まさに個人技なんです。個人のそれぞれの内面世界を自分の特殊な手法で表現しているというのがアール・ブリュットの特徴です。もちろん、人間ひとりひとりとは当然のことながら文化の中で生きていくわけですから、だから少しでも文化の匂いがするというは仕方ないのですが、アール・ブリュットというのはその中でも最も文化色の薄い芸術なのです。もちろん、具象画の場合は日本らしい顔だったり風景だったりが出てくるので日本らしさを感じざるを得ません。ただ、私たちが見ていきたいのはそういう文化的な背景の中で、個人の特殊性がちゃんとした場所を与えられて生きていくことができるということなのです。アール・ブリュットのアーティストを見ていくと、自分の精神の非常

に深いところまでずっと探って行って、そこから何らかのものを作り上げるわけですが、それを見るとどの世界にいる人間も持っているような普遍的な深いものを感じることができるのです。たとえば、私たちの内面の奥底には、いろいろな対立するものがあるのです。それは善悪ではなく、男性・女性とか、光・暗闇とか、いろんな対立要素をみんな持っているのです。「この絵を見てみると、暗い所に色が明確に表されている…」そういう対立の構成というのがはっきり見て取れるわけです。アーティストたちは自分の深いところから、自分の感覚やエネルギーを感じ取ってそれを作品の形に再構成していくわけです。作品にする時にどういった風な再構成の仕方をするのかを見ていくのは非常に面白いことです。

Q:各国にこういう作家達はいると思うのですが、アール・ブリュットという概念で位置づけられている国はたくさんあるのですか？

A:70年代からアール・ブリュットは各地で注目されて流行になってきています。それは、68年の5月革命という社会的な革命を経て、ブルジョワの支配的な価値観に対する一種の社会的な抵抗と、その価値観を崩壊させるためのひとつの動きとして、カウンターカルチャーを探るという動きがあったからだと思えます。アール・ブリュットは特に、作家は自分個人の表現だけをする人で、その作品に商品価値があるかどうかとか、人が受け入れてくれるかどうかとか、全然考えないわけです。それは非常に密着的な意味合いもあるし、物欲からまったく離れた作品でもあるわけです。そういうのを認めている国というのは、フランスやアメリカの他にも、ブラジルとか台湾、ヨーロッパ全体で認められているし、日本でも認められている。というのは、今グローバル化の中で社会の価値観が、役に立つもの、お金になるもの、商品価値のあるものというところによく向いて行ってしまっていて、経済性とか収益性とかばかり考えてしまっている。それに対する反対の動きとして、精神性を描いていて、

でもまったくその利益は考えない。無欲で個人の持っているものを表現できる場として注目されているのだと思います。だからこそ、いろんな国にアール・ブリュットに対する認識が総合的に広がっていると思います。日本では、アール・ブリュットに対する認識というのはまだ始まったばかりで、先ほど言ったようなグローバル化に対する反対の意味合いとして出てきている状態です。それをどこに見出していかかというのには、まだ限定的だと思います。まさに知的障害者の作品にそれが見られるのじゃないかということで、知的障害者の作品に注目しているわけなのですが、そのうちに、そういうカテゴリに入る作品はもっと広く、いろんな作家のあり方があるということがわかってきて、もっと違う考え方の人、違う表現の人、違う分野の人にも広がって行くと思うのです。要は、個人の持っているものをいかに表現していくか、生きざまをいかに表していくかという独特なアートを指しているわけですね。

Q:作家の中には、言語を発することがあまりない方もいらっしゃいます。そういう中で、作品で作家の方が何を訴えたいのか、語りたいたいの、どういうものが伝わってきますか？

A:個人的な見解を申し上げたいと思います。アール・ブリュットのアーティストは外に向けて作品を作るわけではないのです。なので、メッセージを発するためとか、コミュニケーションのための作品ではないんです。むしろ、自分の中にどうしても表さなければならないものを感じて、自分のために作っている作品だと思います。肉体的な必要に応えるためにやっているとは私は感じません。彼らは心の中に病や機能不全を抱えています。でも、彼らの中でそれを修復したり再構築したりする必要性を強く感じているのです。造形的な芸術を行うことで、前向きに自分の中の再構築ができる。自分

の内部に自分自身を表現するということが非常に意味があることなのです。自分自身をそのまま表現しているわけです。普通の人なら対話することでコミュニケーションをはかるのですが、アーティストは自分自身の中にいるんなイメージや彫刻を持っているわけです。そして自分の内面を見て外部に向けて表現することが必要になるわけです。ですからそれは精神病や知的障害の問題ではなく、アーティストだから自分の持っているものを表現せざるを得ないということなのです。

Q:今度、日本の作品がパリで展示されるわけですが、日本のアール・ブリュットに対して何か期待されることはありますか？

A:私が日本に来て作品を選んだのですが、その選ぶ基準というのは、こういう作品をヨーロッパで紹介してこういう成果を期待するという観点から選んだわけではありません。自分の心に強く訴えてくる作品を選んだわけです。もちろん、その中には日本的なものもあるし、そうじゃないものもあるかもしれません。分かりやすい作品もあれば、そうでない作品もあるかもしれません。私がしたいことというのはまだ漠然としていて分からないのです。パリに千点近くの作品が着いてから、私はその作品たちと会話を始めます。彼らの作品が私に何を語ってくれるか、私がそれをどうするのかということ、私としては作品との対話でひとつの物語を組み立てていくのです。これは私と作品との会話ということでもありま

すが、日本文化と西洋文化の対話かもしれません。最初からこういうことをやるからこういうことを期待してるとするのは悲しいのではないのでしょうか。たとえば恋愛でも、誰かを好きになって、でも結末がわかってたらおもしろくないですよね。そういう意味で新しい恋をするようなワクワクする気持ちです。私が期待しているものという特別な言い方もできませんが、ひとつは作品の持っている文化というものがあるかなと思います。もうひとつは、これら作品というのは普遍的な価値となっていくと思うのです。その両者が会合することがあります。そのベストの部分を見てもらいたと思います。

Q:パリの方々は今回持って行く日本の作品をどんな風に受け止められるんでしょうか？

A:期待して待っているようです。たぶん、身近に見たことのあるような作品もあれば、新しい新鮮さをもたらしてくれる作品もあって、両方を兼ね備えていると思うのです。たとえばすごく単純化された絵画などはそうなのですが、他の国のアール・ブリュットの中にも見られます。そういう意味では、身近に感じるでしょう。たとえば面いっぱい描きこむとか、文字を使って形式化していくというのは、いろんなところで同じような傾向があ

ります。漢字を使うことはないですが、文字を使って面ごっしり描きこむというのはアール・ブリュットの特徴なのです。ただ日本で非常に特徴的なのはセラミックです。日本の伝統工芸として陶磁器があるのですが、外国ではほとんど見られないことで、アール・ブリュットのアーティストたちがそういう伝統的な素材である陶磁器を使って、まったく違う個人的な表現をしているというのが非常に面白いと思います。

Q:館長ご自身は今後、今の活動をどういう風に広げていきたいとお考えですか？

A:クリエイションは思きないものです。世の中にアーティストがいる限り、私は仕事にあぶれることはありません。結局、アーティスト

が私の道を決めてくれるのです。私はそのアーティストの作品を感じるものであって、私の栄養素でもあります。

Q:日本のみなさんに何かメッセージを一言お願いします。

A:日本には日本の文化があって、私たちは非常にその文化に惹かれています。でも一方でその日本文化に対するカウンターカルチャーがあります。王な流れとそれに対抗しようとする文化の流れがあって、そういう対立関係があることで新しいものが生まれてくるのです。その新しいものが生まれるのは、非常に活力のあるクリエイションの雰囲気があるから生まれてくるわけで、だから日本でもカルチャーとカウンターカルチャーとの摩擦があることで新しいものが生まれ、新し

いものが生まれてくるようなダイナミックな芸術の動きがあることに私たちはとても関心を持っています。デュビュッフェのコレクションの中で、当時はまったく顧みられていなかったけれども、その後アール・ブリュットの大作家として認められるようになる人たちが出てきています。今回63人の日本の作家が展示されるのですが、そのうちに国際的にもアール・ブリュットの代表的な作家となられる方の作品があるのではないかと、それは歴史が決めていくことですね。



アール・ブリュット・ジャポネ展 開催直前！

国内事前展覧会を開催しました。

アウトサイダー アート展

～パリ展に行く作家達～

会期：2010年2月5日(金)～7日(日)



毎年1500人を超える参加者が全国から詰め掛ける障害者の福祉をテーマとした一大イベント「アメニティー・ネットワーク・フォーラム4」。このイベントが開催された滋賀県大津市の大津プリンスホテルにてアール・ブリュット・ジャポネ展国内事前展覧会「アウトサイダーアート展～パリに行く作家達～」を開催いたしました。

この展覧会では、パリに行く作家の作品を少しでも多くの方にご覧いただくこと、パリの展覧会に出展する作家のうち33名約100点の作品を展示しました。訪れた観客は、個性あふれる多様な表現に足を止め、凝視していました。

同時に開催したトークイベントでは、作品の制作現場を支える福祉施設の担当者が全国20か所から集結し、「アートを仕事にするには」「展覧会を開催すること」「精神障害の人の創作について」などをテーマに、福祉施設や病院内における造形活動の課題と展望を議論しました。

また、第一線で活躍するアーティスト、田島征三氏と奈良美智氏による鼎談のほか、今後これらの作品が美術品として取り扱われることにあたり想定される事柄について、著作権を専門とする弁護士や美術館学芸員、ギャラリー代表がそれぞれの立場、視点で講演しました。さらには、出展する作家のご家族にご登壇いただき、アーティストと呼ばれるようになった我が子について、周囲や本人、ご自身の変化等について大変興味深い体験談を披露していただきました。

多種多様な講師陣が今回の展覧会を様々な切り口でお話された内容はとても幅広で大変興味深く、人の持つ限りない可能性を改めて感じさせてくれました。

会場内も常に熱気ムンムンで、当初用意した100席では、立ち見ができるほどの盛況ぶりで、国内事前展覧会は成功裏に幕を閉じました。

アール・ブリュット・ジャポネ展 主催/会場 パリ市立アル・サン・ピエール(HALLE SAINT PIERRE)美術館

【後援】(予定) 在日フランス大使館、在フランス日本大使館 【助成】  財団法人 日本財団 財団法人 ダイトロン福祉財団 【協賛】 笹川日仏財団

【日本事務局】 滋賀県社会福祉事業団 企画事業部(ボーダレス・アートミュージアムNO-MA) 担当(田端、齋藤)
所在：〒523-0893 滋賀県近江八幡市桜宮町235 電話：0748-31-2481 FAX：0748-31-2482 E-mail:art-brut@sisyazi.jp

アール・ブリュット・ジャポネ展 ニュースレター 2010年3月発行
編集/発行 滋賀県社会福祉事業団 写真：工藤和彦、高石巧 デザイン：高石巧